



広島県三次市文化財調査報告書 第18集

花園第 28・29 号古墳・岡竹遺跡 発掘調査報告書

2025 年

三 次 市 教 育 委 員 会
特定非営利活動法人 広島文化財センター

花園第 28・29 号古墳・岡竹遺跡 発掘調査報告書

2025 年

三 次 市 教 育 委 員 会
特定非営利活動法人 広島文化財センター

例 言

- 1 本報告書は、昭和 55 年度に実施した公務員宿舎（広島県警察本部宿舎）建設事業に係る花園第 28・29 号古墳及び岡竹遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、岡竹遺跡発掘調査団が三次市土地開発公社から委託を受けて、昭和 55 年 5 月 6 日から昭和 55 年 6 月 14 日まで実施した。
- 3 発掘調査は、遺構の実測及び写真撮影について新祖隆太郎氏の協力を得て、中村芳昭が実施した。
- 4 整理事業及び報告書作成作業は、尾本原勇人が基礎的の整理を行った後、令和 5～6 年度に三次市教育委員会の指示・監理のもとで、委託を受けた特定非営利活動法人広島文化財センターが出土遺物の実測・写真撮影、遺構・遺物のトレース、編集等を実施した。なお、遺物番号 21 については、三枝健二氏が実測したものを使用し、所見も引用した。
- 5 本報告書は、Ⅰ～Ⅳを尾本原・藤岡孝司、Ⅴを藤岡が執筆した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は、S B を竪穴住居跡、S K を土壇・土坑、S D を溝状遺構、P をピットとした。
- 7 遺物番号については、挿図と図版を同一としている。
- 8 本報告書に使用した方位は磁北である。
- 9 本報告書の第 1 図は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図（三次）の一部を使用した。
- 10 本遺跡の発掘調査を実施した昭和 55 年では、昭和 40 年に文化財保護委員会が発行した全国遺跡地図に基づき、岡竹 2 号遺跡として扱ったが、平成 18 年に広島県教育委員会が発行した広島県遺跡地図では、隣接する岡竹 1 号遺跡と岡竹 2 号遺跡を統合して岡竹遺跡としているため、本報告書では岡竹遺跡とした。
- 11 発掘調査の記録類及び出土品は、三次市教育委員会において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	6
IV	遺構と遺物	8
1	花園第 28 号古墳	8
2	花園第 29 号古墳	10
3	岡竹遺跡	11
4	遺構外出土遺物	24
V	まとめ	32

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
第 2 図	発掘調査範囲図 (1:400)	6
第 3 図	遺構配置図 (1:250)	7
第 4 図	第 28 号古墳実測図 (1:80)	8
第 5 図	第 28 号古墳周溝内土壌実測図 (1:40)	9
第 6 図	第 29 号古墳実測図 (1:80)	11
第 7 図	S B 1・S B 2 遺構実測図 (1:80)	12
第 8 図	S B 1 出土遺物実測図 (1:3、1:2)	14
第 9 図	S K 5 遺構実測図 (1:40)	15
第 10 図	S K 6 遺構実測図 (1:40)	15
第 11 図	S K 7 遺構実測図 (1:40)	16
第 12 図	S K 7 出土遺物実測図 (1:3)	16
第 13 図	S K 8 遺構実測図 (1:40)	16
第 14 図	S K 9・S K 10 遺構実測図 (1:40)	17
第 15 図	S K 11 遺構実測図 (1:40)	17
第 16 図	S K 12・S K 13 遺構実測図 (1:40)	18
第 17 図	S K 14 遺構実測図 (1:40)	18
第 18 図	S D 1 遺構実測図 (1:50)	19
第 19 図	S D 2 遺構実測図① (1:200)	20
第 20 図	S D 2 遺構実測図② (1:50)	21
第 21 図	S D 2 出土遺物実測図① (1:3)	22

第22図	S D 2 出土遺物実測図② (1:3)	23
第23図	S D 3 遺構実測図 (1:50)	24
第24図	P 77 ~ P 228 遺構実測図 (1:80)	26
第25図	P 1 ~ P 76 遺構実測図 (1:80)	27
第26図	ピット出土遺物実測図 (1:3)	29
第27図	遺構外出土遺物実測図 (1:3、2:3、1:2)	30

表 目 次

第1表	S B 1 出土遺物観察表	15
第2表	S K 7 出土遺物観察表	16
第3表	S D 2 出土遺物観察表	23
第4表	ピット観察表(1)	28
第5表	ピット観察表(2)	29
第6表	ピット出土遺物観察表	29
第7表	遺構外出土遺物観察表	31

図 版 目 次

図版1	1 遺跡全景(北から)
	2 第28号古墳完掘状況(南から)
	3 S K 1 完掘状況(北から)
図版2	1 S K 2・S K 3 完掘状況(北東から)
	2 S K 4 完掘状況(西から)
	3 第29号古墳完掘状況(南西から)
図版3	1 第29号古墳遺物出土状況(東から)
	2 S B 1・S B 2 完掘状況(東から)
	3 S B 1 完掘状況(北から)
図版4	1 S B 1 遺物出土状況①(西から)
	2 S B 1 遺物出土状況②(北東から)
	3 S B 2 完掘状況(南から)
図版5	1 S K 6 完掘状況(北から)
	2 S K 7 完掘状況(西から)
	3 S K 8 遺物出土状況(南西から)

- 図版 6 1 S K 11 ～ 13 ・ P 55 ～ 57 完掘状況（南から）
 2 S K 14 完掘状況（東から）
 3 P 36 完掘状況（南西から）
- 図版 7 1 S D 1 とその周辺ピット群完掘状況（南から）
 2 S D 2 完掘状況①（南東から）
 3 S D 2 遺物出土状況（北西から）
- 図版 8 1 S D 2 完掘状況②（北西から）
 2 第 28 号古墳周辺ピット群完掘状況（南から）
 3 第 29 号古墳周辺ピット群完掘状況（東から）
- 図版 9 出土遺物 1 （S B 1 ・ S K 7 ・ S D 2）
- 図版 10 出土遺物 2 （S D 2 ・ ピット ・ 遺構外）

I はじめに

三次市では、発掘調査を実施した遺跡について、さまざまな状況から未報告となっている遺跡の整理作業を順次実施している。そうした中で、今回報告する遺跡についても、発掘調査を実施して40年以上経過していることから、不明瞭になっている部分も少なからず生じているが、可能な限り当時の記録や記憶を掘り起こし、再整理して報告したものである。

岡竹遺跡は、公務員宿舎(広島県警察本部官舎)建設事業に係り、昭和55年2月25日付けで三次市土地開発公社(以下「市公社」という。)から広島県教育委員会教育長(以下「県教委」という。)に対して、事業予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて協議があった。

これを受けて、現地踏査を行った結果、遺跡の有無を確認するための試掘調査が必要と判断した。試掘調査を行った結果、弥生時代の竪穴住居跡のほか、溝状遺構などを確認し、昭和55年3月31日付けで県教委から市公社に対して、岡竹2号遺跡を確認した旨回答した。

これを受けて、遺跡の現状保存について協議した結果、市公社は設計変更等による現状保存は困難であったため、文化財保護法に基づく埋蔵文化財の発掘について文化庁長官あてに通知し、文化庁長官は、発掘調査が必要なことを市公社に通知した。

発掘調査の実施にあたり、岡竹遺跡発掘調査団(団長 三浦亮)が組織され、市公社との間で発掘調査委託契約が締結されて、昭和55年5月6日から同年6月14日まで発掘調査を実施した。

なお、発掘調査にあたっては、市公社の協力を得るとともに、広島県教育委員会、三次市文化財保護委員会からご指導、また地元をはじめ多くの方々のご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

【調査体制】

団 長	三浦 亮(三次市文化財保護委員会委員長)
事 務 局 長	伊藤正壯(三次市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	谷川信明(三次市教育委員会社会教育課係長)
調 査 員	中村芳昭(三次市教育委員会社会教育課主事)
調査補助員	平林 工

II 位置と環境

本遺跡の所在する三次市は、広島県北部の中国脊梁山地南側にある三次盆地の中央に位置する。市街地では、西流する馬洗川と南流する西城川と北流する江の川がほぼ中央で合流し、江の川本流となって西流しながら中国山地を横断し日本海へ注いでいる。地形は典型的な盆地状で、標高 400 m 前後の中国山地が盆地北辺を形づくり、南辺は標高 200 m 前後のなだらかな低丘陵地形となっている。現在までに、旧石器時代から近世に至る各時代の遺跡が多数確認されている。遺跡は 4,000 か所以上が確認されており、県内の遺跡の約 3 分の 1 がこの三次地方に集中するという県内でも有数の遺跡密集地である。その中で、岡竹遺跡は三次市十日市南岡竹に所在している。

なお、花園古墳群については、これまで幾多の経緯の中で順次、番号が付されており、所在地がいくつもの遺跡と重複している状況となっている。これは、古墳群が集落遺跡と区別して命名されていることが要因であるが、調査された古墳については、その都度付された古墳番号によって報告している。したがって、今回報告する花園第 28・29 号古墳についても、岡竹遺跡の発掘調査によって新たに確認した古墳であるが、花園古墳群に位置づけて、発掘調査段階に花園古墳群に連続する番号を付したものである。

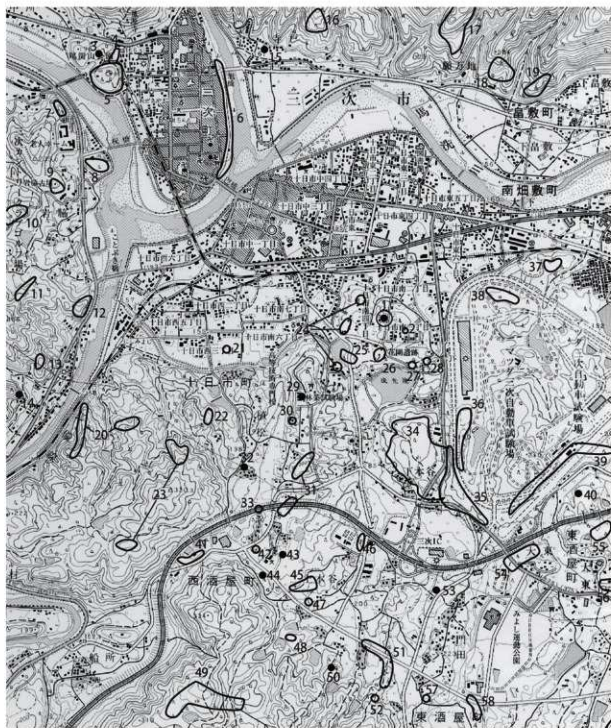
以下、市内の遺跡を概観する。

旧石器時代 この時代の遺跡の確認例は少ないが、代表的なものとして下本谷遺跡（西酒屋町）があり、始良・丹沢火山灰層群が確認されている。また、下山遺跡群（四拾貫町）や松ヶ迫 A 地点遺跡（東酒屋町）でも、石核・剥片などが出土している。

縄文時代 この時代の遺跡も確認例は少ない。早期の遺跡では住居跡と押型土器が出土した松ヶ迫 B 地点遺跡（東酒屋町）の他、重岡山遺跡（塩町）、宗祐池西遺跡（南島敷町）があり、後期の遺跡では縄文土器・石核が出土した元国遺跡（栗屋町）、晩期の遺跡では下の割遺跡（和南町）などがある。

弥生時代 この時代に入ると確認された遺跡の数は急増するが、全体的に前期～中期前半の遺跡は少なく、中期後半に増加する。集落跡は、近年の調査によって確認例が増えており、前期では高峰遺跡（南島敷町）で円形の竪穴住居跡が確認されている。また、中期～後期にかけて 10 軒以上の竪穴住居跡が確認された塩町遺跡（塩町）では土器、石器とともに分銅形土製品が出土し、さらに県北地域の中期後半の指標土器となっている塩町式土器が出土している。また、帰海寺谷遺跡（海渡町）では掘立柱建物跡と竪穴住居跡が、また住田遺跡（三若町）では竪穴住居跡が、井上佐渡守土井屋敷跡（島敷町）では後期の竪穴住居跡が確認されている。

墳墓は、前期では畑原遺跡（大田幸町）、高平 A 号墓（十日市南）、中期後半では陣床山遺跡（三若町）で 11 基の土壇墓が確認されている。また、宗祐池西遺跡（南島敷町）では塩町式土器を出土した四隅突出型墳丘墓、陣山遺跡では同一区画内に企画性をもって築造されたと考えられる貼石・列石をもつ 5 基の四隅突出型墳丘墓が確認され、さらに同種の墳墓群である殿山墳墓群（大田幸町）、四拾貫小原遺跡（四拾貫町）、高平 B 号墓（十日市南）、史跡花園遺跡（十日市町）などがある。また、三次地区工業団地の造成工事に伴って確認された史跡矢谷古墳（東酒屋町）は



第1図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

1. 岡竹遺跡 2. 岡竹大久保遺跡 3. 尾関山古墳 4. 三次下屋敷跡 5. 尾関山城跡 6. 旭堤(浅野堤)・旭堤下層遺跡 7. 三戸城跡 8. 丸小山古墳群 9. 岩脇遺跡・岩脇古墳(県史跡)・岩脇古墳群・岩脇丘陵墓 10. 元国古墳群 11. 岩脇大久保古墳群・岩脇大久保遺跡 12. 重広城跡 13. 鍋屋谷古墳群 14. 中村古墳 15. 寺戸庵寺跡 16. 寺戸古墳群 17. 福谷城跡 18. 願万寺古墳群 19. 二本松古墳群 20. 下原古墳群 21. 下原遺跡 22. 沼山城跡 23. 植松古墳群 24. 花園古墳群(県史跡若宮古墳含む) 25. 大樽池古墳群 26. 花園遺跡(一部史跡) 27. 日光寺遺跡(県史跡) 28. 日光寺経塚群 29. 高平A~C地墳墓 30. 高平遺跡・高平古墳群 31. 大久保古墳群・大久保D地点遺跡 32. 酒屋高塚古墳(県史跡) 33. 大久保C地点遺跡 34. 下本谷遺跡(一部県史跡) 35. 下本谷東遺跡 36. 善法寺古墳群 37. 黄幡東古墳群 38. 黄幡古墳群 39. 天狗松北古墳群 40. 松ヶ迫第1号古墳 41. 抜湯古墳群 42. 末元城跡 43. 大久保南古墳 44. 寄貞西古墳 45. 寄貞古墳群 46. 三段田城跡 47. 寄貞城跡 48. 大原追古墳群 49. 丸草田古墳群 50. 大原追南古墳 51. 大坂古墳群 52. 大坂南古墳群 53. 門田遺跡 54. 天狗松南古墳群 55. 松ヶ迫E地点遺跡 56. 松ヶ迫G地点遺跡 57. 門田河内古墳群 58. 門田敦盛古墳群

墳形が前方後円形の四隅突出型で、吉備地方に特徴的な特殊壺・特殊器台が出土しており、弥生時代から古墳時代への墓制の変遷や三次地方と山陰及び吉備との関係を究明する上で貴重な資料となっている。

古墳時代 この時代に入ると遺跡の数は格段に増加するが、その大部分は古墳で、5世紀代のものが多い。4世紀末～5世紀初頭のものとして、方墳の下山手第5号古墳（向江田町）があり、それに隣接して5世紀前半期の下山手第4号古墳（向江田町）がある。

5世紀後半になると、県史跡岩脇古墳（粟屋町）、県史跡酒屋高塚古墳（西酒屋町）、善法寺古墳群（西酒屋町）、大久保古墳群（西酒屋町）、太郎丸古墳（四拾貫町）、四拾貫小原第1号古墳（四拾貫町）、糸井馬場第1・2号古墳（糸井町）、上大縄古墳（和知町）、県内最大規模の172基の古墳からなる史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群（小田幸町・高杉町）、未調査ではあるが、県内最大規模の帆立貝形古墳である県史跡糸井大塚古墳（糸井町）などがある。5世紀末のものとしては、四拾貫小原第17号古墳（四拾貫町）、5世紀～6世紀初頭及び前半期のものとしては、上定第25・26・27号古墳（大田幸町）、糸井塚の本第2号古墳、大坂第6・7・8号古墳がある。

6世紀になると、初頭では緑岩古墳（南島敷町）、上四拾貫第10号古墳（四拾貫町）、中葉では若屋第9号古墳（粟屋町）、粟屋高塚古墳（粟屋町）、後半では岩脇大久保第1号古墳（粟屋町）があるが、寺側古墳（三若町）のように横穴式石室を埋葬主体とする古墳が三次盆地にも出現する。

一方、集落跡としては、5世紀代頃までのものとして高峰遺跡北区（南島敷町）や三段畑遺跡（糸井町）、塩町遺跡（塩町）、勇免遺跡（大田幸町）、住田遺跡（若宮町）がある。6世紀後半になると確認されている遺跡は増えて、松ヶ迫遺跡群、緑岩遺跡（南島敷町）、高峰遺跡（南島敷町）、前六反田遺跡（東酒屋町）、深茅遺跡（向江田町）、大伴遺跡（大田幸町）、岩脇大久保遺跡（粟屋町）、山手遺跡（海渡町）などで堅穴住居跡などが確認されている。また、岡西D地点I地区（上志和地町）では、古墳時代と考えられる掘立柱建物跡が数棟確認されている。

古代 この時代の遺跡としては、旧三谿郡内に位置する史跡寺町廃寺跡（向江田町）と上山手廃寺跡（向江田町）がある。特に、7世紀後半頃に創建された寺町廃寺跡はわが国最古の仏教説話集『日本書紀』に著わされている三谷寺に比定されるもので、同寺院の瓦を焼成した大当瓦窯跡（和知町）とともに史跡に指定されている。また、旧三次郡の郡衙跡とされる県史跡下本谷遺跡（西酒屋町）や同郡内の寺院跡で7世紀末頃に創建された寺戸廃寺跡（三次町）も確認されている。また、岡西F地点遺跡I地区（上志和地町）からは掘立柱建物跡なども確認されている。

中世以降 市内には、50数か所にも及ぶ城跡が確認されており、本遺跡の近隣では陣山城跡（向江田町）や馬洗川を隔てた南側の平野部には県史跡高杉城跡がある。陣山城跡は、背後（北西側）に堀切・堅堀・土塁を配置し、南東方向へ郭を連ねている。高杉城跡は、知波夜比古神社境内を中心とする約70m四方で遺構が確認でき、周囲には幅約4～5m、深さ約1mの堀、深さ約1mの堀と高さ1～2m、幅3～4mの土塁が廻っており、部分的には石積みも見られる。城主は祝氏と伝えられ、1553（天文22）年に尼子と毛利の合戦が行われている。一方、中世期の発掘調査例は少ないが、岡西遺跡群（G地点遺跡I・II地区、F地点遺跡II地区、D地点遺跡II・III地区、C地点遺跡I・II地区）からは多くの掘立柱建物跡や土坑などが確認されている。また、井上佐渡守土居屋敷跡では中世末期から江戸後期の掘立柱建物跡や土坑、堀跡、井戸などが確認されている。

参考文献

- 三次市『三次市史Ⅱ』2004年
- 広島県双三郡三次市史料総覧刊行会『広島県双三郡三次市史料総覧 第五篇』
- (下本谷遺跡) 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡—推定備後国三次郡銚跡の発掘調査報告—』1975年／広島県教育委員会／広島県立埋蔵文化財センター『下本谷遺跡発掘調査概報第1～4次／第5～6次』1980年～1985年
- (下山遺跡群) 広島県教育委員会ほか『下山遺跡群発掘調査報告』1980年
- (松ヶ迫遺跡群) 広島県教育委員会ほか『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1981年
- (重岡山遺跡) 重岡山遺跡発掘調査団『重岡山遺跡発掘調査報告』1980年
- (宗祐池西遺跡) 三次市教育委員会『宗祐池西遺跡』2000年
- (陳床山遺跡) 陳床山遺跡発掘調査団『陳床山遺跡群の発掘調査』1973年
- (高蜂遺跡) 広島県教育委員会『緑岩古墳—三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1983年
- (綿海寺谷遺跡・住田遺跡・山手遺跡) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『県営ほ場整備事業(川西東部・南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1997年
- (井上佐渡守土居屋敷跡) 三次市教育委員会『井上佐渡守土居屋敷跡』1998年
- (高平A遺跡) 広島県教育委員会『広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告』『広島県文化財調査報告第9集』1971年
- (陣山遺跡) 三次市教育委員会『陣山遺跡』1996年
- (四拾貫小原遺跡) 四拾貫小原発掘調査団『四拾貫小原』1969年
- (花園遺跡) 三次市教育委員会『史跡花園遺跡—第1次・第2次調査と整備—』1979年・1980年
- (下山手第4・5号古墳) 三次市教育委員会『下山手第4・5号古墳—三次市水道事業(第Ⅲ期拡張事業)に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1994年
- (岩脇古墳) 三次市教育委員会ほか『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』2018年
- (酒屋高塚古墳) 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』1983年
- (大久保古墳群) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』1979年
- (太郎丸古墳) 木村豪章『備後三次市太郎丸古墳発掘調査報告』『古代古備 第4集』1961年
- (糸井馬場第1号古墳) 広島県立埋蔵文化財センター『糸井馬場第1号古墳』1988年
- (糸井馬場第2号古墳・糸井塚の本第2号古墳) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『糸井馬場第2号古墳・糸井塚ノ本第2号古墳』1988年
- (上大縄古墳・下の割遺跡) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『上大縄古墳・下の割遺跡』1989年
- (浄栄寺・七ツ塚古墳群) 植田千佳穂『史跡浄栄寺・七ツ塚古墳群測量調査報告』『広島県立歴史民俗資料館研究紀要第4集』2003年
- (上定古墳群・大伴遺跡) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『大判・上定・殿山—三次市大田幸町所在遺跡群の発掘調査—』1987年
- (大坂第6・7・8号墳) 大坂遺跡発掘調査団『大坂遺跡』1985年
- (緑岩古墳) 広島県教育委員会『緑岩古墳—三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1983年
- (深茅遺跡) 三次市教育委員会『深茅遺跡・岩脇墳墓群』2013年
- (岩脇大久保遺跡) 三次市教育委員会『岩脇大久保第1号古墳・岩脇大久保遺跡—成田山中国分院敷地造成に伴う発掘調査報告書—』1991年
- (寺側古墳) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『寺側古墳』1995年
- (寺町庵寺跡) 三次市教育委員会『史跡寺町庵寺跡—推定三谷寺跡第1～8次発掘調査総括報告書—』2022年
- (大当瓦窯跡) 三次市教育委員会『備後寺町庵寺跡—第3次発掘調査概報—』1982年
- (寺戸庵寺跡) 三次市教育委員会『寺戸庵寺跡発掘調査概報—第一次・第二次—』1970年・1971年
- (岡西遺跡群) 三次市教育委員会『岡西G地点遺跡Ⅰ地区・岡西F地点遺跡Ⅰ地区発掘調査報告書』1996年／『岡西G地点遺跡Ⅱ地区・岡西F地点遺跡Ⅱ地区・岡西D地点遺跡Ⅰ地区発掘調査報告書』1997年／『岡西D地点遺跡Ⅱ地区・岡西C地点遺跡Ⅰ地区発掘調査報告書』1998年／『岡西D地点遺跡Ⅲ地区・岡西C地点遺跡Ⅱ地区発掘調査報告書』1998年
- (高杉城跡) 三次市教育委員会『高杉城堀跡試掘調査・高杉段遺跡発掘調査報告書』2016年
- (陣山城跡) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』1978年

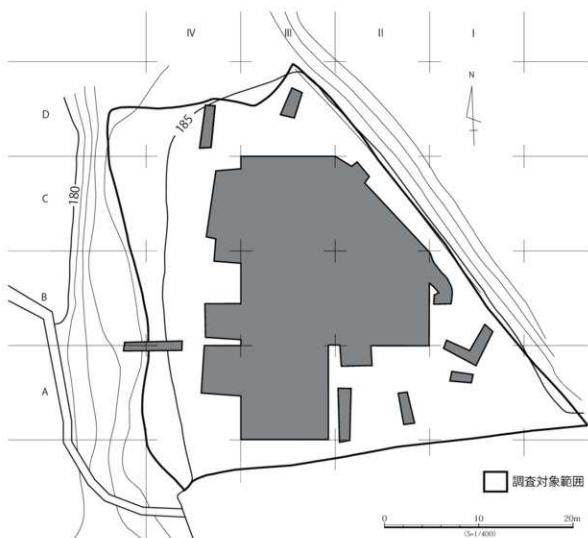
Ⅲ 調査の概要

馬洗川の南側には低丘陵がいくつか広がっており、岡竹遺跡はその一つ、JR 三次駅の南側に広がる通称“岡竹低丘陵”に位置する。この丘陵の最南端の標高 196.7 m には史跡花園遺跡が位置しており、これから北に伸びる尾根先端付近に岡竹遺跡は位置している。

この丘陵には、史跡花園遺跡のほか、広島県史跡若宮古墳や同史跡日光寺住居跡、また花園古墳群、大樽池古墳群や岡竹大久保遺跡があり、谷を隔てた西側丘陵上には高平遺跡や高平古墳群、東丘陵上には善法寺古墳群などが所在し、三次市内でも遺跡の密集地として知られている。

遺跡は、北に伸びる小丘陵尾根の先端部あたりに立地し、標高約 185 m を測る。今回の調査面積は 1,630m²である。

調査は、試掘調査の結果に基づいて、調査区全面を遺構確認面まで重機により表土除去を行い、その後人力により遺構の検出作業を行った。そして、調査区域に 10 m グリッドを設定し、南北

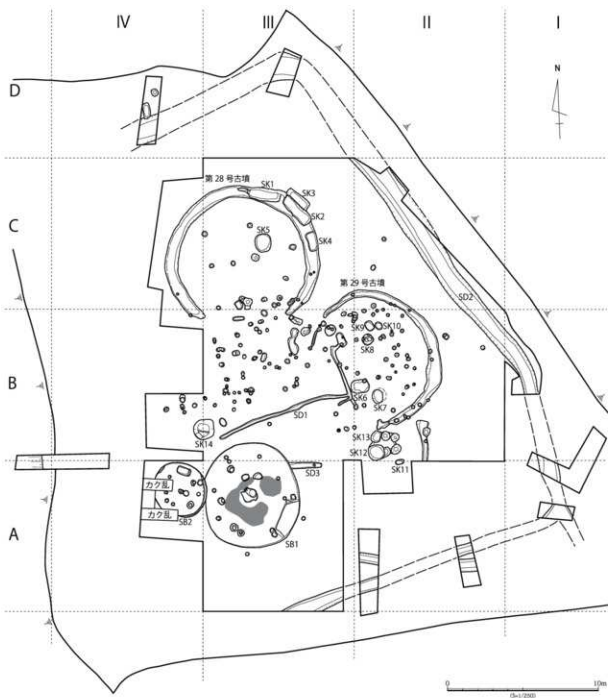


第2図 発掘調査範囲図(1:400)

方向に南から A ～ D、東西方向に東から I ～ IV とした。

遺構の検出作業の結果、古墳 2 基と竪穴住居跡 2 軒、その他溝状遺構や土坑、多数のピットを確認したが、遺構の精査及びその後の整理作業での検討の結果、木根の可能性が高いものなど人為的な遺構と考えられないものも含まれていたため、それらは遺構からは除外した。

また、遺物は土器や石器などが出土した。出土量については、遺構に対して決して多くはない状況である。



第3図 遺構配置図(1:250)

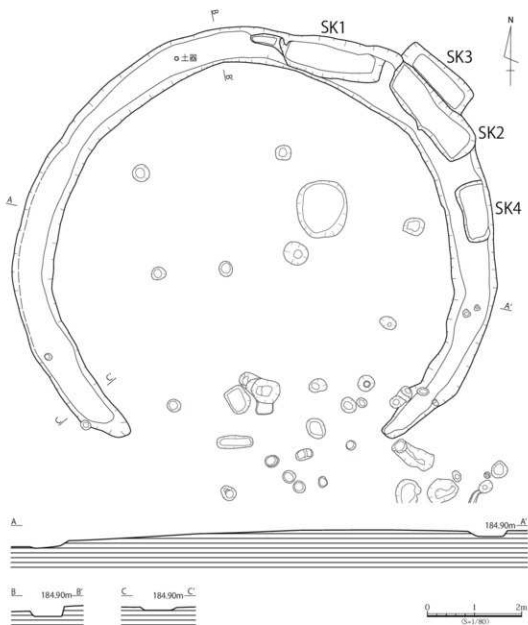
IV 遺構と遺物

1 花園第28号古墳

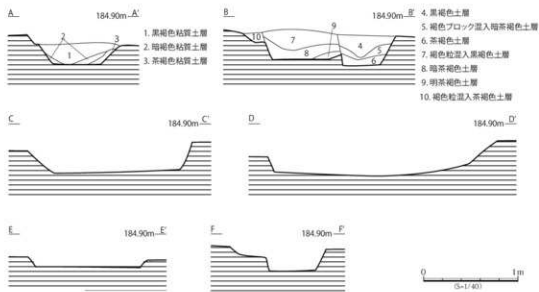
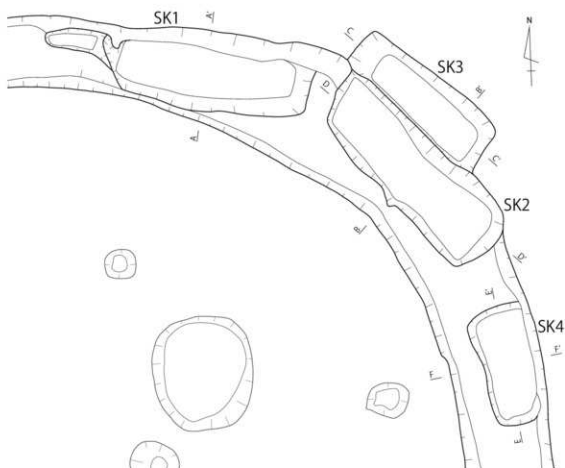
調査区の北西部に位置し、第29号古墳の北西に隣接して構築する。墳丘をはじめ周溝など遺構上部はすでに削平されていたが、現存する周溝から直径約10mを測る円墳と考えられる。墳丘範囲内には、中世の遺物を出土するピットも検出していることから、中世以降に削平を受けていると考えられる。

ア 墳丘

墳丘はすでに削平されており、確認できなかったため、高さは不明である。また、墳丘上



第4図 第28号古墳実測図(1:80)



第5図 第28号古墳周溝内土壌実測図(1:40)

の埋葬施設など遺構の存在も確認できなかった。

イ 周溝

周溝も上部を削平されていると考えられ、南側の一部は検出できなかったが、ほぼ円形に廻っている。底面はほぼ平坦で、現存幅で約0.8～1.0m、深さ約10～15cmを測る。

ウ 周溝内土壌

周溝北東部に、周溝外辺に沿ってほぼ等間隔に連続するように底面を掘り込んで土壌を4基検出した。北から東に向かって直列にSK1、SK2・SK3、SK4と構築されているが、SK3は周溝外にSK2に並列してこれを切って構築している。したがって、主軸がほぼ東西方向になるSK1からほぼ南北方向になるSK4まで構築されていることになる。SK1からSK2まで約0.25m、SK2からSK4まで約0.54mの間隔がある。

土壌からは一部で土器がわずかに出土するのみで、遺構の性格は明確にできない。しかし、土層観察などによると、周溝がある程度埋没した後に土壌が掘り込まれていると考えられるものの、周溝に沿って構築されていることから、周溝を意識していると考えられ、墓壇と考えられる。SK2とSK3以外は重複関係になく、新旧は不明であるが、ほぼ一定の間隔をもって構築されていることから、それぞれ意識して順次構築されたものと考えられる。そうした中で、SK2とSK3は密接な関係性を指摘できると考えられる。

SK1は、長辺約2.2m、短辺約0.8m、周溝底面からの深さ25cm測り、長方形の平面形を呈する土壌である。底面はほぼ平坦である。なお、東側に隣接して長辺約0.6m、短辺約0.24m、底面からの深さ約22cmの土坑状の掘り込みを検出したが、SK1との関連性は不明である。

SK2は、SK3に切断されている。長辺約2.3m、短辺約0.8m、周溝底面からの深さ約18cmを測り、長方形の平面形を呈する土壌である。底面はほぼ平坦である。

SK3は、SK2を切断して構築する。長辺約1.74m、短辺約0.6m、周溝確認面からの深さ約40cm、周溝底面からの深さ約25cmを測り、長方形の平面形を呈する土壌である。底面はほぼ平坦である。

SK4は、長辺約1.3m、短辺約0.65m、周溝底面からの深さ約10cmを測り、長方形の平面形を呈する土壌である。底面はほぼ平坦である。

エ 出土遺物

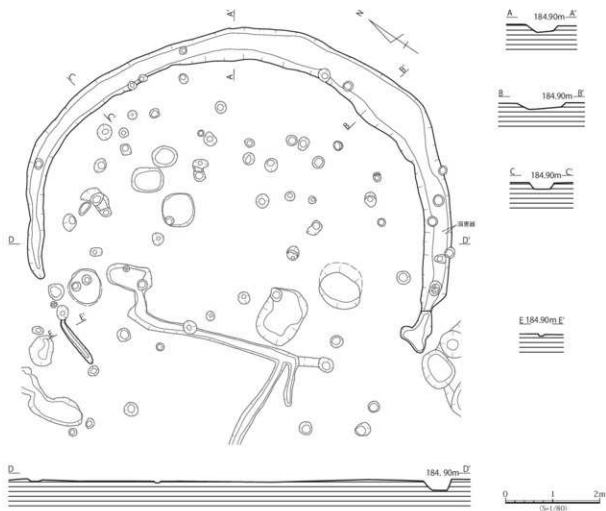
SK1の東側周溝内から須恵器杯形土器、また、SK4から土師器碗形土器が出土している。なお、図及び写真資料は掲載したが、現在所在不明のため、図示することはできなかった。

2 花園第29号古墳

花園第28号古墳の南東に隣接して位置し、墳丘をはじめ周溝など遺構上部はすでに削平されていたが、現存する周溝から直径約9.1mを測る円墳と考えられる。墳丘範囲内には、中世の遺物を出土する溝状遺構やピットの検出していることから、中世以降に削平を受けていると考えられる。

ア 墳丘

墳丘はすでに削平されており、確認できなかったため、高さは不明である。また、墳丘上



第6図 第29号古墳実測図(1:80)

の埋葬施設など遺構の存在も確認できなかった。

イ 周溝

周溝も上部を削平されており、西側約40%は検出できなかったが、ほぼ円形に廻っていたと考えられる。底面はほぼ平坦で、現存幅で約0.6～1.0m、深さ約16～24cmを測る。

ウ 出土遺物

周溝南東部の覆土から須恵器が出土しており、写真資料は掲載したが、現在所在不明のため、図示することはできなかった。

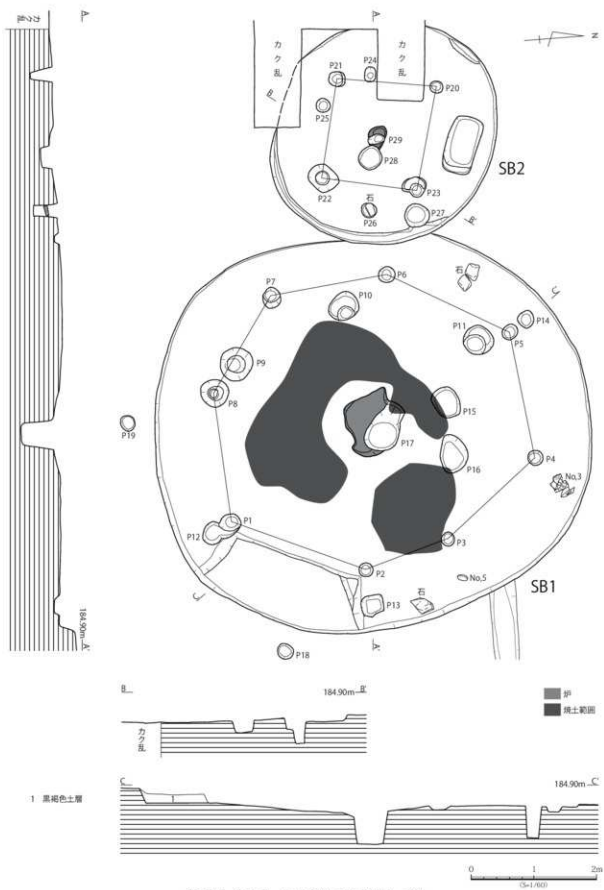
3 岡竹遺跡

(1) 竪穴住居跡

① SB1

調査区南西部に位置し、西壁の一部でSB2と重複するが、新旧関係は確認できなかった。また、SD3とも重複関係にあるが、新旧関係は確認できなかった。

径約6.3～7.0m、深さ約5～20cmを測り、やや不整な円形の平面形を呈する竪穴住居



第7図 SB1・SB2遺構実測図(1:60)

跡である。床面はほぼ平坦である。壁直下に溝は廻らないが、遺構南東部に壁に沿って長さ2.3～2.8m、壁に直行して幅1.0～1.1m、床面からの高さ約14cmのベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構は黒褐色土による盛土によって構築している。壁から0.7～1.0mにP1～P8の8個の主柱穴を検出し、径20～45cm、深さそれぞれ60cm、57cm、40cm、50cm、20cm、45cm、58cm、53cmを測る。各柱穴間は1.4～2.2mを測り、ベッド状遺構とは重複しない配置となっている。また、ベッド状遺構の両端ほぼ中央にはP12、P13を検出し、径約30cm、深さそれぞれ10cm、7cmを測る。なお、主柱穴とは別に西側ではP9～P11を検出し、径45～50cm、深さそれぞれ32cm、18cm、15cmを測る。その他、中央部から北側にかけてP14～P17を検出し、径25～50cm、深さそれぞれ7cm、5cm、12cm、49cmを測る。また、壁外側では南から東側にかけてP18、P19を検出しており、径約25cm、深さ約15cmを測る。また、遺構のほぼ中央部には、炉と考えられる深さ約5cmの掘り込みを検出した。なお、遺構中心部約3.5mの範囲には焼土が広がっている。遺物は少ないが、ほとんどが炉及び北半部で出土する。

出土遺物は、弥生土器の1～3、石製品の4、5がある。1は壺形土器、2は甕形土器で、3は甕形土器と考えられる。1は、口縁部に3条の凹線文、頸部にはヘラ状工具による刺突文を施す。2は、口縁部がくの字状に強く外反し、胴部外面には浅い刷毛目整形を施す。3は、口縁部から約15cm下の胴部に凸帯が廻る。4は砥石で、残存長8.2cm、最大幅2.6cm、最大厚1.3cmを測り、現存部で6面の使用面が確認できる。5は磨石で、長さ13.6cm、断面は長径5.4cm、短径4.8cmのやや不整な楕円形を呈する。上下両端には、使用痕が認められる。その他、東壁及び西壁直下からそれぞれ扁平な自然石が出土しているが、用途は不明である。

② S B 2

調査区南西部に位置し、東壁の一部でS B 1と重複するが、新旧関係は確認できなかった。また、西側は一部攪乱により切断されている。

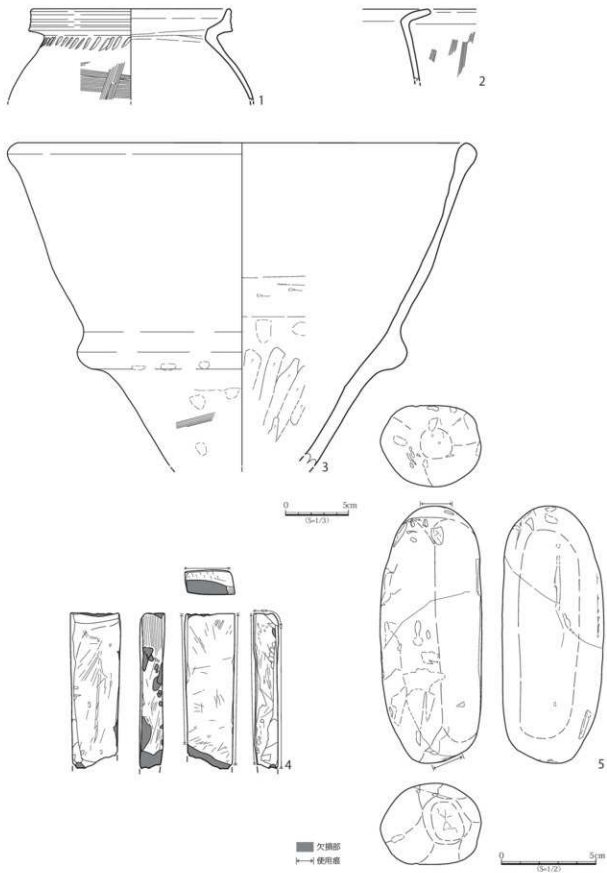
径約6.3～7.0m、深さ約5～20cmを測り、やや不整な円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。床面はほぼ平坦である。東南側及び北西側の一部には、壁直下に約15cm、深さ約5cmの壁溝を検出した。壁から0.6～0.8mに約1.6mの距離をもってP20～P23の4個の主柱穴を検出し、径20～25cm、深さそれぞれ13cm、27cm、24cm、35cmを測る。その他、P24～P29を検出し、径20～40cm、深さそれぞれ36cm、29cm、20cm、18cm、17cm、33cmを測る。また、遺構北部には床面を掘り込んで、長辺約0.9m、短辺約0.5m、深さ約20cmを測る土坑を検出した。なお、遺構のほぼ中央部には、焼土はほとんど検出されていないが、炉と考えられる深さ約16cmの掘り込みを検出した。

出土遺物は、皆無であるが、P26からは扁平な自然石が出土している。

(2) 土坑

① S K 5

調査区北部に位置し、第28号古墳と重複するが、時期が確定できないことから、新旧関係は明らかにできない。



第8図 SB1出土遺物実測図(1:3、1:2)

第1表 SB1出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量 (cm)	色 調	胎 土	焼成	形態、調整など	備 考
1	弥生土器 甕	口径：15.5 底径：— 器高：(7.2)	浅黄橙色	2mm以下の砂粒 を含む	良好	外面：3条の凹線、刺突文、横方向のハケ目の上に縦方向のハケ目 内面：横方向のへら磨き、横方向のナデ	外面に煤付着
2	弥生土器 甕	—	浅黄橙色(外面) 灰黄色(内面)	1mm以下の砂粒 含む	良好	外面：縦方向の浅いハケ目、ヨコナデ 内面：ミガキ？、ヨコナデ	
3	弥生土器 甕形土器か	口径：35.5 底径：— 器高：(25.6)	浅黄色	2mm以下の砂粒 を含む	良好	外面：ハケ目、指頭圧痕 内面：上半部 横方向の強いナデ 下半部 縦方向の強いナデ	

No.	種別	石材	法量 (cm)			重量(g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
4	砥石	頁岩	(8.2)	2.6	1.3	(49.7)	使用面6面
5	敲石	珪化木	13.6	5.4	4.8	541.1	

長辺1.2m、短辺1.03m、深さ21cmを測り、やや不整な隅丸方形の平面形を呈する土坑である。底面は、ややすり鉢状を呈する。

出土遺物は、皆無である。

② SK6

調査区中央部に位置し、SK7、SD1に隣接する。第29号古墳と重複するが、時期が確定できないことから、新旧関係は明らかにできない。

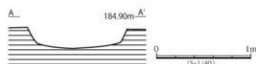
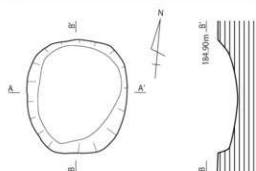
長辺約1.2m、短辺約0.9m、深さ約30cmを測り、やや不整な隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。底面は、ややすり鉢状を呈しており、北壁直下にはピット状の掘り込みが認められる。

出土遺物は、皆無である。

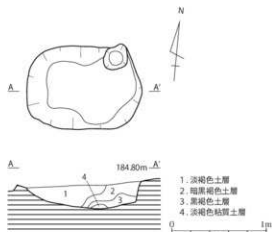
③ SK7

調査区中央部に位置し、SK6、SD1に隣接する。第29号古墳と重複しており、古墳より古い。

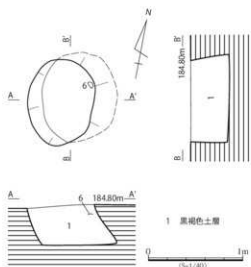
長径約0.9m、短径約0.7m、深さ約42cmを測り、やや不整な楕円形の平面形を呈する。



第9図 SK5遺構実測図(1:40)



第10図 SK6遺構実測図(1:40)



第11図 SK 7遺構実測図(1:40)



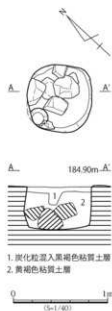
第12図 SK 7出土遺物実測図(1:3)

第2表 SK 7出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態、調整など	備考
6	縄文土器 浅鉢	器高:(6.2)	暗灰黄色	1mm大の砂粒を わずかに含む	良好	外面:磨消縄文 内面:ミガキ	
7	縄文土器 器種不明	残存長:(4.5)	橙色	1mm大の砂粒多 く含む	良好	外面:縄文	

土坑である。壁は、東側で下方が広がるように掘り込まれており、底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、6、7があり、縄文土器の破片である。



第13図 SK 8遺構実測図(1:40)

④ SK 8

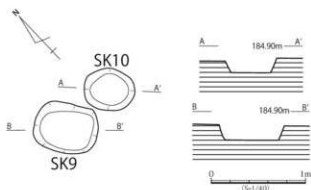
調査区中央部に位置し、SK 9、SK 10に隣接する。第29号古墳と重複するが、時期が確定できないことから、新旧関係は明らかにできない。

一辺約0.7 m、深さ約46 cmを測り、やや不整な隅丸方形の平面形を呈する土坑である。底面は、ほぼ平坦であるが、西側壁直下にはピット状の掘り込みが認められる。

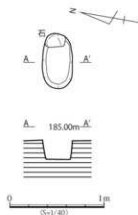
出土遺物は、自然石が数個投げ込まれた状況で出土しているが、その他土器など人工的な遺物は出土していない。

⑤ SK 9

調査区中央部に位置し、SK 8、SK 10に隣接する。第29号古墳と重複するが、時期が確定できないことから、新旧関係は明らかにできない。



第14図 SK9・SK10遺構実測図(1:40)



第15図 SK11遺構実測図(1:40)

長辺0.67 m、短辺約0.52 m、深さ約15 cmを測り、やや不整な隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、皆無である。

⑥ SK10

調査区中央部に位置し、SK8、SK9に隣接する。第29号古墳と重複するが、時期が確定できないことから、新旧関係は明らかにできない。

長径約0.54 m、短径約0.45 m、深さ約16 cmを測り、やや不整な楕円形の平面形を呈する土坑である。底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、皆無である。

⑦ SK11

調査区中央部やや南寄りに位置し、第29号古墳及びSK12、SK13、P55～P57に隣接する。

長径約0.58 m、短径約0.32 m、深さ約20 cmを測り、やや不整な楕円形の平面形を呈する土坑である。底面は、ほぼ平坦である。

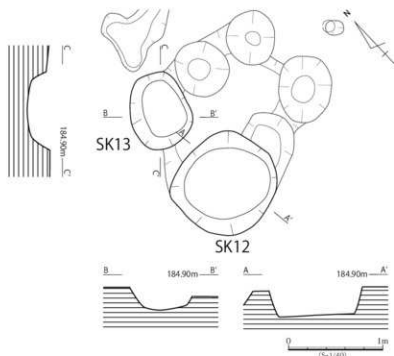
出土遺物は、自然石が1点出土しているが、その他土器など人工的な遺物は出土していない。

⑧ SK12

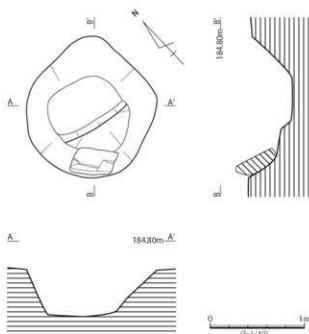
調査区中央部やや南寄りに位置し、第29号古墳及びSK11、SK13、P55～P57に隣接する。

一辺約1 m、深さ約30 cmを測り、やや不整な隅丸方形の平面形を呈する土坑である。底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、皆無である。



第16図 SK12・SK13遺構実測図(1:40)



第17図 SK14遺構実測図(1:40)

⑨ SK13

調査区中央部に位置し、第29号古墳及びSK11、SK12に隣接する。

長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約24cmを測り、やや不整な楕円形の平面形を呈する土坑である。底面は、ややすり鉢状を呈する。

出土遺物は、皆無である。

⑩ SK14

調査区中央部西寄りに位置し、SD1に隣接する。

一辺約1.3m、深さ約50cmを測り、やや不整な隅丸方形の平面形を呈する土坑である。

底面は、二段に掘り込まれているが、ほぼ平坦である。

出土遺物は、自然石が投げ込まれているように1点出土するが、その他土器など人工的な遺物は出土していない。

(3) 溝状遺構

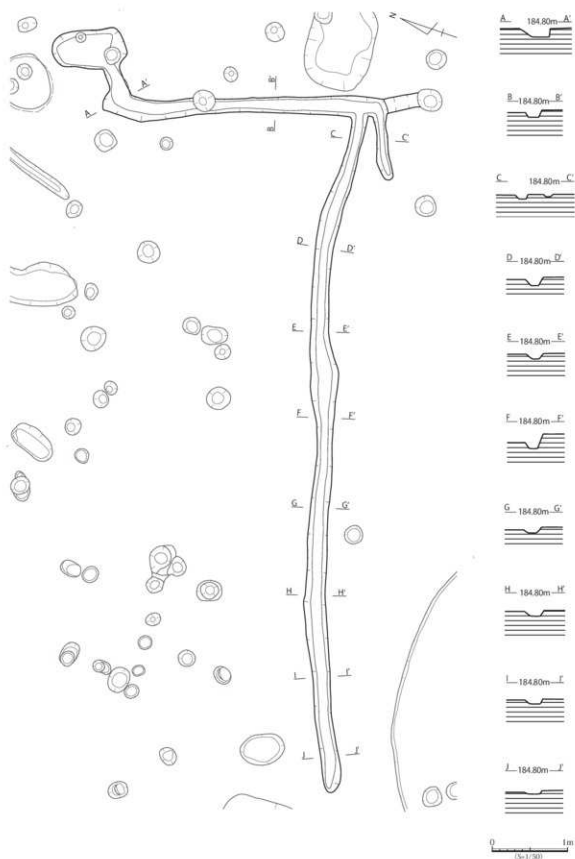
① SD1

調査区ほぼ中央部に位置し、第29号古墳と重複するが、古墳より新しい。

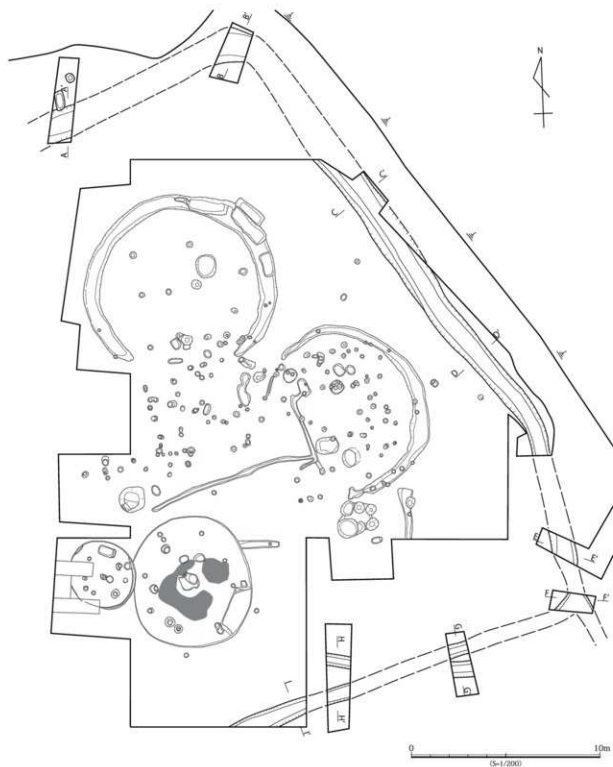
上部を削平されている可能性があるため、全容を検

出していないと考えられるが、遺存部分で、南北方向に長さ約3.7m、東西方向に長さ約9mを測り、L字形に延びる溝状遺構であるが、北側と南側はさらにわずかに不整形に延びる。幅0.2～0.3m程度で、深さは、約0.1m前後を測る。

出土遺物は、小破片がわずかにあるが、中世の所産と考えられる。



第18図 SD 1 遺構実測図(1:50)

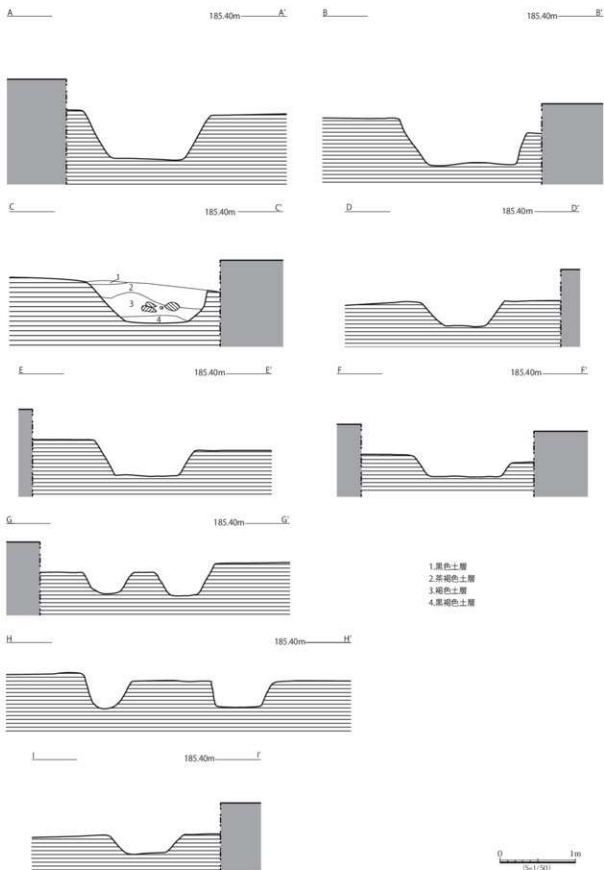


第19図 SD2遺構実測図①(1:200)

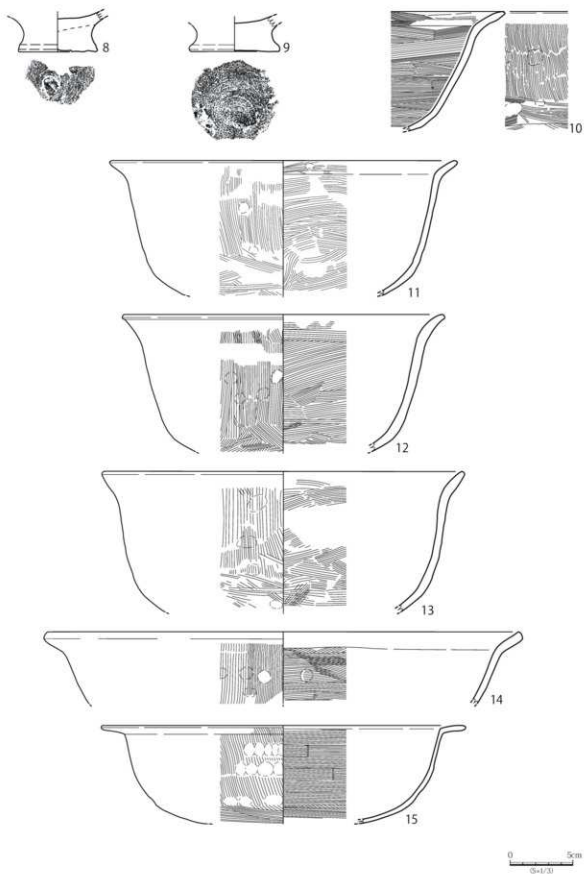
② SD2

調査区に沿ってほぼ周回するように位置するが、一部はトレンチにより確認しているため、全容は不明である。

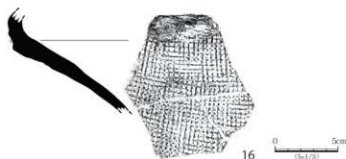
北西から南東方向に約37 m、北東から南西方向に20 m以上延びる溝状遺構である。確認



第20图 SD 2遺構実測図②(1:50)



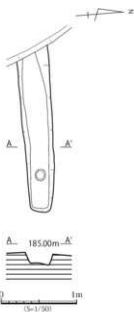
第21図 SD2出土遺物実測図①(1:3)



第22図 SD 2出土遺物実測図②(1:3)

第3表 SD 2出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態、調整など	備考
8	土師質土器 柱状高台杯	底径:(6.2) 器高:(3.2)	橙色	3mm以内の砂粒 を少量含む	良好	内外面:ヨコナデ	
9	土師質土器 柱状高台杯	底径:7.2 器高:(2.8)	橙色	1mm大の砂粒を 少量含む	良好	外面:ヨコナデ 内面:調整不明	
10	土師質土器 鍋	器高:(9.5)	にぶい黄橙色	2mm以内の砂粒 を少量含む	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭 痕、不定方向のハケ目の上から指頭 痕 内面:横方向のハケ目の上から指頭 痕	外面に煤付着
11	土師質土器 鍋	口径:(26.8) 最大径:(27.2) 底径:(20.1) 器高:(10.7)	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒 を少量含む	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭 痕、不定方向のハケ目 内面:横方向のハケ目、不定方向の ハケ目	外面に煤付着
12	土師質土器 鍋	口径:(25.2) 最大径:(25.6) 底径:(17.8) 器高:(10.9)	にぶい黄褐色	2mm以内の砂粒 を少量含む	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭 痕、不定方向のハケ目 内面:横方向のハケ目、不定方向の ハケ目	外面に煤付着
13	土師質土器 鍋	口径:(28.3) 最大径:(28.8) 底径:(22.0) 器高:(11.1)	にぶい黄褐色	3mm以内の砂粒 を含む	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭 痕、不定方向のハケ目の上に指頭痕 内面:横方向のハケ目、不定方向の ハケ目	外面に煤付着
14	土師質土器 鍋	口径:(37.3) 最大径:(38.0) 器高:(5.7)	にぶい黄橙色	精良	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭痕 内面:斜め及び横方向のハケ目の上 から指頭痕	外面に煤付着
15	土師質土器 鍋	口径:(28.5) 最大径:(28.9) 底径:(20.1) 器高:(7.8)	淡黄橙色	2mm以内の砂粒 を少量含む	良好	外面:縦方向のハケ目の上に指頭 痕、横方向のハケ目 内面:横方向のハケ目	外面に煤付着
16	須恵器 甕	器高:(7.8)	暗灰色(頭部) 浅黄色(胴部)	1mm大の砂粒を 少量含む	良好	外面:格子状のタタキの後ヨコナ デ、格子状のタタキ 内面:ナデ	亀山焼



第23図 SD3遺構実測図
(1:50)

面からの深さは0.25m～0.65mである。底面はほぼ平坦ではあるが、標高は南から北に向かって低くなっている。なお、南側では一部2条の溝状遺構を確認しているが、同一遺構が一部分で分岐しているのか、別遺構であるかは確認できなかった。出土遺物は、北東部分を中心に比較的多く出土する。

出土遺物は、8～16があり、8、9は土師質土器で、柱状高台を有する杯形土器である。10～15は土師質土器の鍋で、外面には多量の煤が付着している。口縁部は11～14は緩やかに外反するが、15は逆L字状に強く屈曲する。16は須恵器の所謂亀山焼の甕形土器で、外面の格子タタキ目は約4mmである。

③ SD3

調査区南部に位置し、SB1と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

長さ2.2m以上、幅0.3m～0.4m、深さ0.14mを測り、東西方向に延びる溝状遺構である。東端部近くで、直径13cm、深さ約10cmのピットを検出したが、本遺構との関連性は不明である。

出土遺物は、皆無である。

(4) ピット

ピットは、第28号古墳及び第29号古墳と重複あるいはそれらの周辺で検出している。

調査段階ではさらに多くのピットを検出したが、調査段階での所見や整理段階での検討により、木根等の可能性が考えられるものは除外し、最終的には153基のピットを確認した。規模については第6、7表のとおりである。

なお、一部柱穴などの可能性が考えられるピット(P36など)もあるが、建物群を構成する柱穴の連続性は認められず、性格を特定できるピットはない。

出土遺物は、皆無のものが大半であるが、一部出土したものの覆土への流れ込みと考えられる。

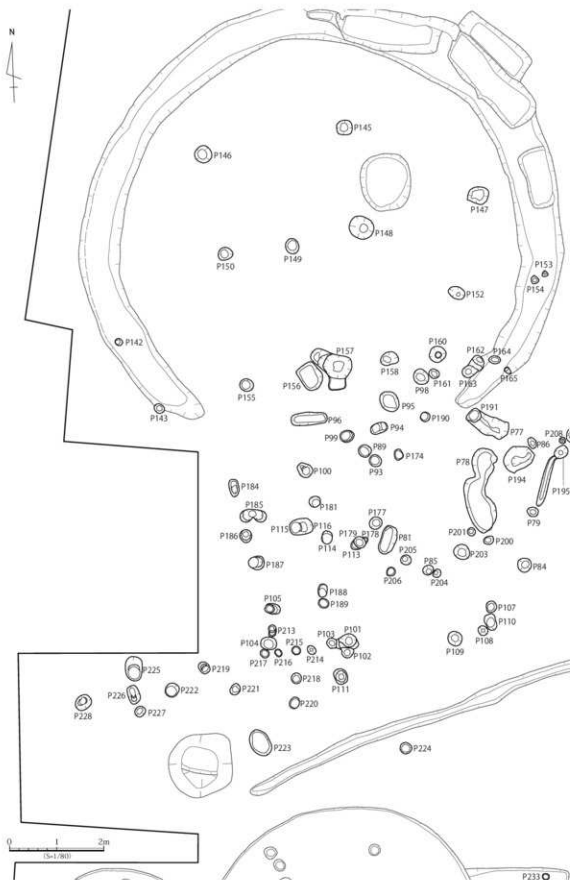
出土遺物は、17がP51、18がP109から出土する。17は土師質土器杯形土器、18は須恵器鉢形土器である。

(5) 遺構外出土遺物

遺構検出作業などで、25～32の遺物が出土している。

19は白磁の椀形土器で、20は土師質土器の釜で、口縁部直下に貼り付けによる罫が巡る。21は後期旧石器と考えられる石核で、三枝健二氏の所見によれば、側面に平坦な円礫面を背面に平坦な剥離痕を残す分厚いブロック状の剥片を素材として、打面側の一边を背面側から大きく剥離、他の短辺部に背面側から粗い加工を施しており、剥離角度が鈍角的でその規模も小さく顕著な蝶番剥離が生じるなど、槌器様の石器として捉えられている。22～24

は石製品である。22は石錘で、上下両端に切り込みが施されている。23は敲石で、下端に叩打痕、上端に擦り痕が認められる。24は砥石で、一方の平坦面に使用痕が認められる。25、26は鉄製品である。25は、釘の可能性もあるが、何らかの基部と考えられる。26は小刀である。



第24図 P 77 ~ P 228遺構実測図 (1 : 80)



第25図 P1～P76遺構実測図(1:80)

第4表 ビット観察表(1)

No.	距離 (cm)			調査区	出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ		
1	23	21	34	B-I	
2	24	17	21	B-I	
3	32	24	44	B-I	自然石
4	28	24	30	B-I	
5	25	23	25	B-I	
6	22	20	18	B-I	
7	24	24	23	B-I	
8	28	21	22	B-I	
10	27	26	48	B-I	
11	22	17	24	B-I	
12	31	23	51	B-I	
13	26	22	53	B-I	
14	25	25	20	B-I	
15	20	18	36	B-I	
16	34	22	61	B-I	
17	15	14	25	B-I	
18	19	15	21	B-I	
19	30	26	50	B-I	
20	30	28	53	B-I	
22	16	15	30	B-I	
23	17	16	24	B-I	
24	21	18	24	B-I	
25	31	26	32	B-I	
26	27	25	42	B-I	
27	20	19	26	B-I	
29	22	17	43	B-I	
31	27	24	52	B-I	
32	20	20	20	B-I	
33	26	24	32	B-I	
34	29	22	43	B-I ~ B-II	
35	27	26	31	B-II	
36	28	19	61	B-II	土師質土器(口、胴)、東播系須恵器 (鉢、瓦質土器?) (備)
37	18	17	35	B-II	
38	37	28	26	B-II	
39	37	17	32	B-II	
40	25	17	58	B-II	
41	25	25	31	B-I	
42	29	27	59	B-I	
43	31	24	45	B-I	
44	34	30	18	B-I	
45	35	32	35	B-I	自然石
48	29	27	21	B-II	
49	22	21	45	B-II	土師質土器(鉢)
50	62	18	29	C-II	
51	29	27	63	B-II	土師器(壺?)、土師質土器(口)
52	20	17	52	B-II	
53	60	50	15	B-I	
54	21	19	39	B-I	
55	70	55	35	B-I	
56	57	55	31	B-I	
57	58	48	22	B-I	
58	15	13	51	B-II	
60	29	26	22	C-I	
61	35	29	37	C-I	
62	30	27	29	B-I	
63	18	18	34	C-I	
64	17	16	34	C-I	
65	20	20	42	B-I ~ C-I	
66	15	14	22	B-I	
67	31	20	46	B-I	
68	22	21	30	B-I	

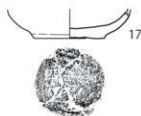
No.	距離 (cm)			調査区	出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ		
69	20	18	54	B-I	
70	25	22	24	B-I	
71	22	21	43	B-I	
72	26	24	35	B-I	
73	34	29	19	B-I	
74	24	24	26	B-I ~ B-II	
75	30	28	32	B-II	
77	51	-	33	B-II	
78	178	52	10	B-II	
79	25	20	30	B-II	
81	60	30	41	B-II	
84	30	29	24	B-II	
85	23	20	57	B-II	
86	34	17	43	B-II	
88	25	24	34	B-II	自然石
93	26	24	33	B-II	
94	37	22	31	B-II	
95	56	37	13	B-II	
96	76	27	20	B-II	
98	35	29	44	C-II	
99	30	25	47	B-II	
100	32	30	23	B-II	
101	32	27	-	B-II	
102	26	26	-	B-II	自然石
103	23	22	-	B-II	
104	37	33	27	B-II	
105	33	21	19	B-II	
107	25	23	42	B-II	
108	20	19	25	B-II	
109	30	29	56	B-II	自然石
110	30	29	50	B-II	自然石
111	34	27	65	B-II	
113	26	22	37	B-II	
114	27	22	33	B-II	
115	35	32	72	B-II	
116	-	32	62	B-II	
142	17	14	24	C-IV	
143	22	19	20	B-IV	
145	35	30	24	C-II	
146	36	35	20	C-II ~ C-IV	
147	49	39	19	C-II	
148	52	44	43	C-II	
149	37	28	31	C-II	
150	30	26	32	C-II	
151	36	25	36	C-II	
153	16	14	26	C-II	
154	17	16	26	C-II	
155	28	26	29	B-II ~ C-II	
156	58	45	23	C-II	自然石
157	90	74	30	C-II	
158	36	26	39	C-II	
160	33	33	24	C-II	
161	22	19	29	C-II	
162	26	18	24	C-II	
163	34	24	32	C-II	
164	25	16	23	C-II	
165	15	11	29	C-II	
174	23	18	23	B-II	
177	27	24	23	B-II	
181	25	24	51	B-II	
184	37	20	28	B-II	
185	52	27	47	B-II	

第5表 ビット観察表(2)

No.	規格 (cm)			調査区	出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ		
186	27	25	35	8-Ⅱ	
187	33	29	38	8-Ⅱ	
188	28	18	34	8-Ⅱ	自然石
189	23	20	32	8-Ⅱ	自然石
190	20	20	36	8-Ⅱ	
191	32	25	31	8-Ⅱ	
194	5.8	5.8	20	8-Ⅱ	自然石
195	30	24	36	8-Ⅱ	
200	22	17	37	8-Ⅱ	
201	17	17	20	8-Ⅱ	
202	22	20	35	8-Ⅱ	
204	20	17	57	8-Ⅱ	
205	22	21	38	8-Ⅱ	
206	20	18	28	8-Ⅱ	
208	14	14	30	8-Ⅱ	
213	25	15	17	8-Ⅱ	

No.	規格 (cm)			調査区	出土遺物
	長軸径	短軸径	深さ		
214	20	16	52	8-Ⅱ	
215	19	17	24	8-Ⅱ	自然石
216	18	13	20	8-Ⅱ	
217	20	17	8	8-Ⅱ	
218	22	21	36	8-Ⅱ	自然石
219	20	20	43	8-Ⅱ	
220	26	20	24	8-Ⅱ	
221	25	19	45	8-Ⅱ	
222	31	27	33	8-Ⅳ	
223	59	40	6	8-Ⅱ	
224	28	23	38	8-Ⅱ	
225	50	35	53	8-Ⅳ	
226	38	24	15+20	8-Ⅳ	
227	23	20	36	8-Ⅳ	
228	30	29	38	8-Ⅳ	

※番号のないものは欠番



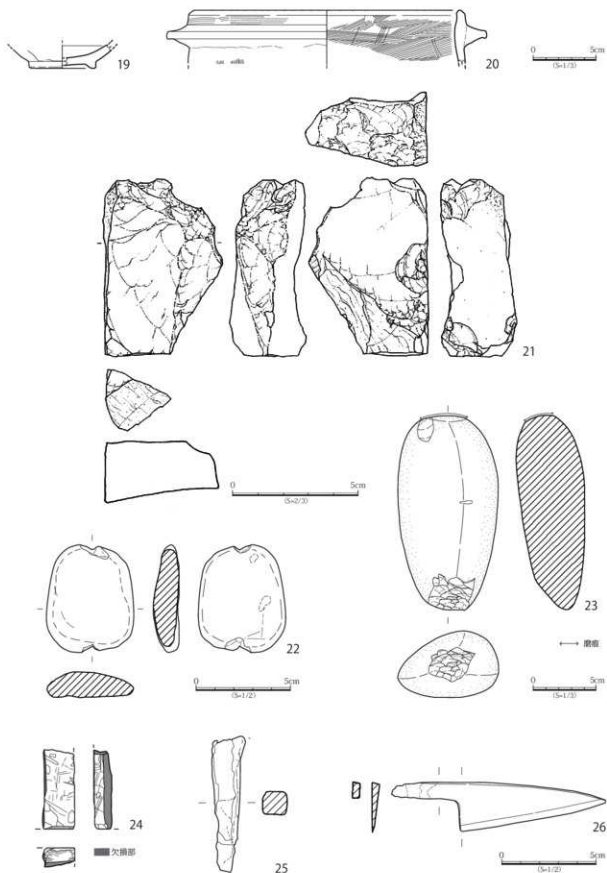
18



第26図 ビット出土遺物実測図(1:3)

第6表 ビット出土遺物観察表

No.	出土位置	種別 器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態、調整など	備考
17	P51	土師質土器 杯	底径:5.6 器高:(2.1)	橙色	微小な砂粒をわずかに含む	良好	底部:回転糸切り 内外面:回転ナデ	
18	P109	東播系須恵器 鉢	器高:(7.0)	灰白色	1mm大の砂粒を含む	良好	内外面:回転ナデ	



第27図 遺構外出土遺物実測図(1:3、2:3、1:2)

第7表 遺構外出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態、調整など	備考
19	白磁 碗	底径:4.9 器高:(1.8)	灰白色	微細な黒斑含む	良好	外面:回転ヘラ削り 内面:段状の墨線	
20	土師質土器 釜	口径:21.0 最大径:25.4 器高:(4.2)	にぶい 黄橙色	2mm以内の砂 粒を少量含む	良好	外面:横方向のハケ目、横方向のナデ、縦方向のハケ目 内面:横方向のハケ目の上に縦方向の工具痕	顎は貼り付け

No.	出土位置	種別	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
21	包含層	石核	流紋岩	7.05	4.70	3.00	118.6	
22	包含層	石錘	砂岩	5.6	4.6	1.3	47.1	
23	包含層	敲石	砂岩	15.4	7.9	5.2	934.0	表面の風化激しい
24	包含層 (BⅡ区)	砥石	頁岩	(4.2)	(1.7)	(0.9)	(11.2)	赤間石か 硯片転用の可能性も

No.	出土位置	種別	法量 (cm)	重量 (g)	備考
25	包含層 (BⅡ区)	基部?	全長7.2、頭部幅1.8、 中央幅1.3、中央厚さ1.2	24.7	断面方形
26	包含層 (BⅡ区)	小刀	全長11.3 刃部 長さ8.0、幅2.6、厚さ0.4 茎部 長さ3.3、幅0.9、厚さ0.4	27.0	断面方形

V まとめ

調査の結果、墳丘を削平された古墳2基、竪穴住居跡2軒、溝状遺構3条、土坑10基の他、多数のピットを検出した。なお、花園第28号古墳に伴うと考えられる土壇4基も検出している。今回の調査区域ではそこを取り囲むように中世の所産と考えられるSD2を検出しており、各遺構はSD2に囲まれた内側で検出している外、一部のピット内からも中世と考えられる土器が出土していることなどから、中世には今回の調査対象範囲が大きく削平されていた可能性が高いと考えられる。したがって、古代以前については、底面まで削平が達していない遺構のみが、かろうじて遺存したものと考えられる。

検出した遺構の時期は、SK7を中心とした縄文時代後期、SB1・SB2を中心とした弥生時代後期、花園第28・29号古墳を中心とした古墳時代後期、SD2を中心とした中世ということになる。中でも約150m東側の同一丘陵上には弥生時代後期と考えられる段状遺構などを検出した岡竹大久保遺跡が立地しており、弥生時代後期には広い範囲で集落が展開していたと考えられる。

2基の古墳は、いずれも墳丘が削平されていたことから、墳丘内の埋葬施設は検出できなかったが、第28号古墳については、周溝内に4基の土壇を検出しており、規模の大小はあるが、いずれも古墳に付随した埋葬施設の可能性があると考えられる。なお、出土遺物は所在不明となっていることから詳細は不明であるが、記録によると6世紀前葉とされており、写真で確認する限りではほぼ妥当な見解だと考えている。

なお、今回検出した2基の古墳を含む花園古墳群は、これまでの分布調査及び発掘調査により30基⁽¹⁾が確認されているが、すでに開発等により消滅した可能性があるものも含まれており、花園第6～10号古墳及び花園第23～27号古墳は所在不明となっている。その中で、花園第26・27号古墳として注記がされた遺物は存在しており、これらは6世紀前葉と考えられる須恵器杯・杯蓋・短頸甕である。また、花園第1号古墳は若宮古墳として県史跡に指定され、花園第3・4号古墳はそれぞれ若宮第3・4号古墳として、花園第11～18号古墳はそれぞれ大樽池第1～8号古墳として位置づけられている。これは当初、広範囲にいくつか異なる尾根上に所在する古墳の総称として花園古墳群とされたことによるものと考えられ、5つ程度の支群に分けられるとされている⁽²⁾。今回の調査によって確認した花園第28・29号古墳についても、他の古墳とは異なる尾根上に立地している。

竪穴住居跡は2軒が重複し、遺構上部を削平されているため、覆土がほとんどなく、また遺物もSB2からの出土が皆無であることなどから、新旧関係は明らかにできなかった。

SB1は大型住居跡で、主柱穴を8本有する。床面には広い範囲で焼土を確認しており、焼失した可能性がある。東側壁直下には一部にベッド状遺構を有しており、このベッド状遺構の両サイドにピットを検出したが、ベッド状遺構の機能に関わる施設の可能性も考えられる。また、2軒の住居跡は、中央に炉を設けているが、共通する特徴として、炉の部分にそれぞれ49cm、33cmの深さを有するピットを検出しており、炉の機能に関係する可能性もあるが、本遺構の一带で多数のピットを検出していることから、この遺構に伴うものであるかどうかは慎重な検討を要す

る。

なお、S B 1 では、特徴的な遺物として3の弥生土器が出土している。下半部を欠損しているため、全容は明らかではないが、胴部ほぼ中央と考えられる辺りに幅広の凸帯を巡らせており、形状から考えると甔形土器と考えられる。同時代の県内及び近隣において類似する土器を提示するのは難しいが、庄原市布掛遺跡 S B 5⁽⁹⁾ や広島市安佐南区芳谷遺跡第3号住居⁽¹⁰⁾ から出土している甔形土器が近い。

同出土例は、山陰型甔形土器の一例とも考えられているものであるが、山陰型甔形土器の一般的な形状は、一方の端面近くに把手を有し、もう一方の端面近くに把手あるいは凸帯を有するものを指しており、把手のみのものや把手と凸帯を近接して設置しているものなども見られる。凸帯の代わりに屈曲や端部に向かって急激に窄む状況などが確認される例もあるが、これは同様の意味を有していると考えられる。把手を有することを最大の特徴と考えるならば、本遺跡出土例は該当しないことになろう。出土遺跡数・出土点数は鳥取県・島根県に多い分布状況を示しているが、本遺跡例のような把手を持たないタイプの出土は、広島県及び愛媛県に限られているようである。

大型のものが多い中で、把手を持たない本遺跡出土例のようなタイプは、小型なものが多い傾向にあるが、そうした中にあるのは、広島市佐伯区串山城遺跡⁽⁵⁾、黒谷遺跡⁽⁶⁾、小林A地点遺跡⁽⁷⁾、同安佐南区鯛之迫遺跡⁽⁸⁾ 出土例は把手を持つタイプと同じく大型のタイプとしてあげられる。

山陰型甔形土器については、これまでしばしば論じられており⁽⁹⁾、遺構数に対して出土例が少ないことや広口部を上にして使用するか下にして使用するか、などでその用途もさまざまに考えられており、今だ結論には至っていない。広口部を上にする甔としての利用のほか、出土例が少ないことから集落内での共同利用や祭祀利用、把手を持つことや大型であることなどから煙道としての利用などの説がある。また、朝鮮半島のオンドル状遺構や日本の古墳時代後期の遺跡から出土する筒形土製品などとの形状的類似性も指摘されているが、時期的な連続性はなく、直接的な関連性は現段階では指摘できないようである⁽¹⁰⁾。

以上、類似出土例から検討するために、山陰型甔形土器についてこれまでの研究状況を簡単に整理してみたが、本遺跡出土例については、凸帯の設置位置や胴部全体が急激に窄まる形状、大きさなどから、現段階では山陰型甔形土器の範疇に入れることは困難で、甔形土器である可能性だけ指摘しておきたい。

次に、S D 2 を中心とした遺構の時期を検討しておきたい。P109から出土した須恵器鉢形土器は小破片のため詳細は不明であるが、東播系須恵器と考えられ、口唇部が上方に延びる特徴から12世紀後半以降の可能性が考えられよう。また、S D 2 から出土する土師質土器の鍋は口縁部が幅広になる以前の特徵を有していることから、14世紀代までに収まると考えられ⁽¹¹⁾、22の須恵器甔形土器は所謂亀山焼と考えられるが、叩き目の格子が4mm程度と比較的緻密なことから12世紀後半から13世紀くらいに位置づけられようか⁽¹²⁾。これらを総合的に考えると、本遺跡の中世遺構の時期は概ね12世紀後半から13世紀になると考えられるが、柱状高台の土師質土器の出土を考えると、この中でもやや古くなる可能性を考えておきたい。

【註】

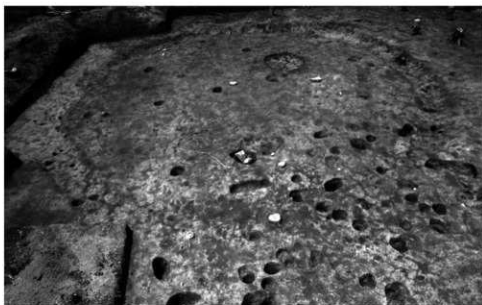
- (1) 若宮第3号古墳(花園第3号古墳)の調査によって周溝のみ確認された古墳を若宮第3号南古墳としており、これを含めて30基とした。
『広島県双三郎・三次市史料総覧』第五篇 広島県双三郎・三次市史料総覧刊行会 1974年
- (2) 『松尾徳市遺跡・県史跡若宮古墳』三次市教育委員会 2014年
- (3) 『布掛遺跡・大仙1号遺跡・大仙2号遺跡発掘調査報告書』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 2003年
- (4) 『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』広島市教育委員会 1984年
- (5) 『串山城遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団 1995年
- (6) 『黒谷遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団 1995年
- (7) 『小林A・B地点遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会 1990年
- (8) 『鯛之迫遺跡』財団法人広島市文化財団 2001年
- (9) 桑原隆博「所謂「山陰型甕形土器」についての覚書ー広島県出土例を中心にしてー」『研究輯録』V 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 2016年
西垣遼「いわゆる“山陰型甕形土器”の再検討ー変遷と分類案の再整理及びその分布についてー」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』XⅧ 手塚山大学考古学研究所 2016年
杉井健「山陰型甕形土器と山陰地方」『古文化談叢』第33集 九州古文化研究会 1994年
谷若倫朗「山陰系「コシキ形土器」の垂下使用法」『愛媛考古学』9 愛媛考古学協会 1986年
- (10) 坂籍「葛城の渡来人へ豪族の本拠を支えた人々へ」『研究紀要』第15集 財団法人由良大和古代文化研究協会 2010年
- (11) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告ー中世瀬戸内の集落遺跡ー』V 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996年
- (12) 花本哲志「広島県内出土の亀山焼系甕についてー城館遺跡出土の未報告資料の紹介とともにー」『研究輯録』X 2000年



版



1. 遺跡全景（北から）

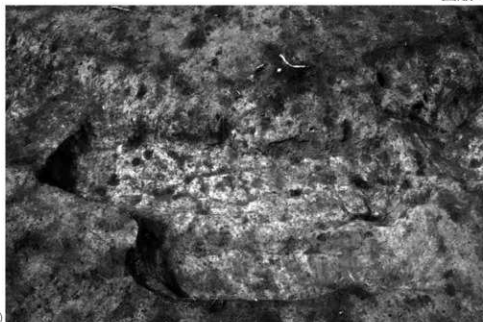


2. 第28号古墳完掘状況（南から）

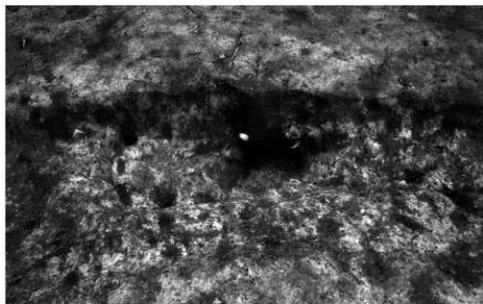


3. SK1完掘状況（北から）

1. SK2・SK3
完掘状況(北東から)



2. SK4完掘状況
(西から)



3. 第29号古墳完掘
状況(南西から)





1. 第29号古墳遺物
出土状況（東から）



2. SB1・SB2
完掘状況（東から）



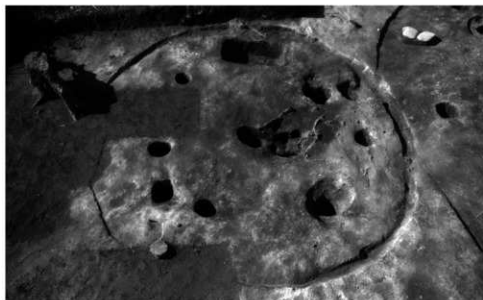
3. SB1完掘状況
（北から）



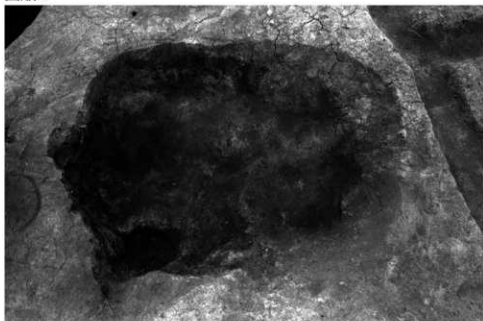
1. SB1遺物出土
状況① (西から)



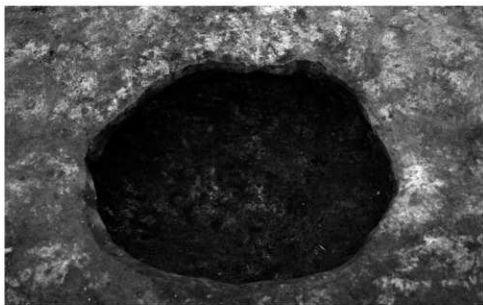
2. SB1遺物 (3) 出土
状況② (北東から)



3. SB2完掘状況
(南から)



1. SK 6完掘状況
(北から)



2. SK 7完掘状況
(西から)



3. SK 8遺物出土
状況 (南西から)

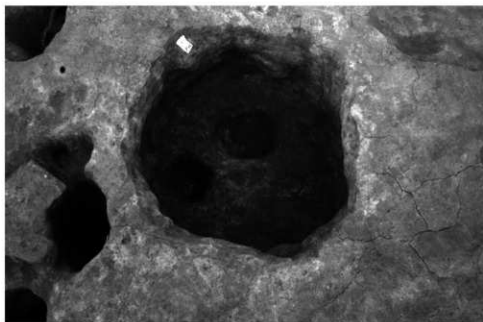
1. SK 11 ~ 13・
P 55 ~ 57 完掘
状況 (南から)



2. SK 14 完掘状況
(東から)



3. P 36 完掘状況
(南西から)





1. SD 1とその周辺
ピット群完掘状況
(南から)



2. SD 2完掘状況①
(南東から)



3. SD 2遺物出土
状況 (北西から)

1. SD2完掘状況②
(北西から)

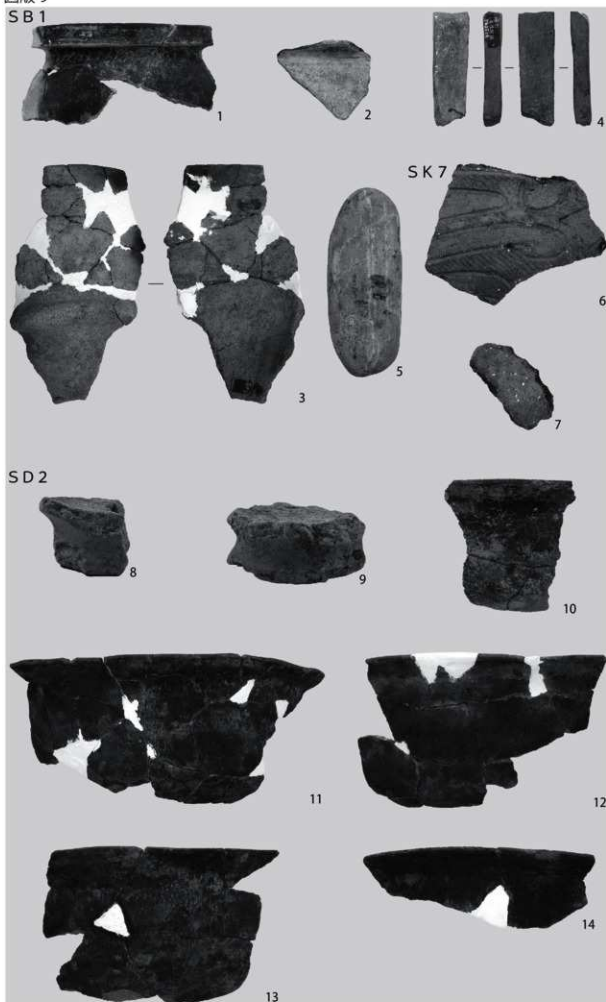


2. 第28号古墳周辺
ビット群完掘状況
(南から)

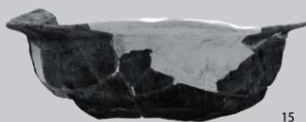


3. 第29号古墳周辺
ビット群完掘状況
(東から)





SD 2



15



16

ビット



17



18

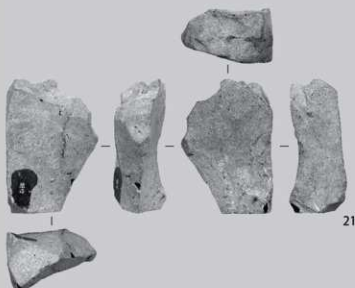
遺構外



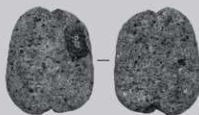
19



20



21



22



24



25



26



23

報告書抄録

ふりがな	はなぞのだい28・29 ごうこふん・おかたけいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	花園第28・29号古墳・岡竹遺跡発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	広島県三次市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	尾本原勇人、藤岡孝司							
編集機関	① 三次市教育委員会社会教育課 ② 特定非営利活動法人広島文化財センター							
所在地	① 〒728-8501 広島県三次市十日市中二丁目8番1号 ② 〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目9番22-601号							
発行機関	三次市教育委員会							
所在地	〒728-8501 広島県三次市十日市中二丁目8番1号							
発行年月日	令和7(2025)年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はなぞのだい28 ごうこふん 花園第28号古墳	みよししとおかいちみなみ 三次市十日市南	34209	210	34度	132度	1980年	1630 ㎡	宿舍建設
はなぞのだい29 ごうこふん 花園第29号古墳				48分	51分	5月6日 ～ 1980年		
おかたけいせき 岡竹遺跡				0秒	19秒	6月14日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
花園第28号古墳	古墳	古墳時代	円墳		須恵器		周溝内土壇	
花園第29号古墳	古墳	古墳時代	円墳		須恵器			
岡竹遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 2軒		縄文土器・弥生土器		他に類のない甕形土器	
		弥生時代	土坑 10基		土師質土器・須恵器		出土	
		中世	溝状遺構 3条		旧石器・礫石・敲石			
要約	低丘陵上に縄文時代後期、弥生時代後期の集落が展開し、その上に古墳が築かれているが、12世紀後半から13世紀には再び開発されている。							
資料保管先	広島県三次市教育委員会							

広島県三次市文化財調査報告書 第18集
花園第28・29号古墳・岡竹遺跡発掘調査報告書

発行日 令和7(2025)年2月28日

編集 三次市教育委員会

〒728-8501 広島県三次市十日市中二丁目8番1号

特定非営利活動法人広島文化財センター

〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目9番22-601号

発行 三次市教育委員会

印刷 株式会社ユニバーサルポスト

